

ささえあう

2014年
4月30日
第20号

事務局 大分市大字森679-6 リフォーム夢舎内 TEL・FAX097-527-5443

早いもので、大分・別府の地に来て2年が経とうとしてます。来た当初は右も左も分からない状況で戸惑うことも多く、自分自身の環境の変化に対する弱さや適応能力の低さを情けなく思うこともありましたが、今ではすっかりと慣れ、学生との触れ合いや日常生活を楽しんでいます。

私と別府との最初のつながりは、なんと小学校の修学旅行で地獄めぐりをした時でした(今も北九州市の小学校の修学旅行は別府だそうです)。その後は隣県とは言えなかなか訪れる機会もなく、数年に一度温泉に入りに来る程度で、いつの日か

関やリハビリテーションの施設が存在すること、街に出ると車椅子に乗った方を多く見かけることなどです。

さて、私は別府大学就任と同時に本ネットワークに関わらせていただきました。理事会や事務局会議では県内の精神障害者を取り巻く状況等を知ることが出来、とても勉強になっています。私は精神科病院にPSWとして12年勤務したのち、教育機関に活動の場を移し8年が過ぎようとしています。やはり現場を離れると残念ながら感覚も鈍ってしまいましたが、ネットワークで刺激を受けられること

医療現場 — 教育機関 — ネットワーク

「生活者の視点」に心動かされ

別府大学 尾口 昌康

縁あってこの地で暮らし、働くことになるとは夢にも思いませんでした。

大分県は私にとっての新天地。無知のまま移り住むのも勿体ないので、まずは別府を含む大分そのものを知ることから始めようと思い色々調べてみると、まさに驚くことばかりでした。私のイメージでは明るく非常に活気のある県という認識でしたが、既に数年前から人口は減少に転じていること、県の人口の約半分を大分市と別府市だけで占めており、その他の地域は過疎や高齢化に苦しんでいること、65歳以上の高齢者の占める割合が40%を超える市が存在すること、市町村合併が活発に行われ、58あった市町村が18にまで減っていること(個人的には天瀬や中津江が日田市に、耶馬溪が中津市になっていることに驚きました)などで

別府市のイメージも、実際に住んでみて大きく変わりました。住む前は「温泉を中心とする観光で成り立つ市」という感覚でしたが、多くの公的医療機

に感謝しています。

また私は医療機関でしか働いたことがないため、就労そのものの支援というより、就労ができるように病状を回復させる支援や、さまざまな要因で病状が悪化し、一時的に就労ができなくなってしまった方々に対し、医療の立場から回復の支援をすることを主な仕事としていました。そのため就労支援の第一線におられる方の、まさに「生活者の視点」で語られるお話は、とても心が動かされるものがあります。

ところで、私は理事に就任させていただいているものの、理事らしいことはなに一つ出来ていないなあ、と常々感じています。今後は本ネットワークの名称でもある就労の推進はもちろんのこと、精神科救急システムに関する事など、自分にできることから始めていきたいと思えます。大分県は社会資源が少ない分、お互いが「顔の見える関係」であることが強みだと思っています。これからも宜しくお願い申し上げます。

企業の側から積極的に

大分県中小企業家同友会障がい者問題委員会の取り組み

大分県中小企業家同友会前障がい者問題委員会委員長

大分精神障害者就労推進ネットワーク副代表

神田道子

障がい者とともに働く「一人間尊重の理念のもと

大分県中小企業家同友会の障がい者問題委員会は、14年間にわたって人間尊重の理念のもと、障がい者とともに働き、地域の中で生活の

できる社会をめざしてきました。その取り組みは、「人を生かす経営とは」という労使見解の実践とともに培われていたものです。

行政・ハローワーク・支援機関等と連携しながら

大分、日田、中津、佐伯、別府などの各支部に障がい者委員会を立ち上げ、県内各地の支援学校の校長先生や進路指導担当の先生方と意見交換や研修など、企業を交えての討論を続けてきました。また、行政、ハローワーク、職業訓練支援機関、就労支援事業所などと協力しながら

ら、障がい者実習企業の受け入れ、雇用につながる企業と雇用成功事例を紹介するフォーラムの開催なども今日まで継続しています。障がい者雇用を広めていくには、経営者だけでなく福祉関連事業、行政の皆さんをはじめ多くの方々との連携が重要であることを実感しています。

100社を超える実習受け入れ企業

今年度、中小企業家同友会は障がい者の職場実習の受け入れ企業を拡大することを決め、同友会会員が力を入れて取り組みました。その結果、今年1月には受け入れ企業は100社を超えることができました。同友会参加企業の6社に1社の割合になります。同友会全会員の努力のたまものと感じております。

なります。この機会を活用して、障がいがある人たちの活躍の場が広がり、社会的な自立に向けた筋道をつくることにもつながるものと考えています。

職場実習は、障がいがある人の力だめしの場、能力や適性、可能性の発見の場として重要であり、企業が障がいがある人を理解する機会にも

中小企業家同友会のホームページ (<http://oita.doyu.jp/>) には「障がい者実習賛同企業マップ」を掲載しており、障がい者委員会の活動についても詳しく知ることができます。ぜひご覧ください。

実感！働くことで表情が変わる

私も、企業経営とともに福祉事業所の運営に関わっています。そのなかで、2年前に作業所に入所した方が訓練を経て、昨年10月から本採用になりました。月給で雇用し社会保険にも加入、週休2日で働いています。このように表情が変わるのかと大変嬉しく感じる昨今で

す。中小企業家同友会の障がい者問題委員会に参加して活動していなければこのような喜びはなかったことでしょう。

中小企業家同友会は2月7日、大分市で「障害者就労支援に関する意見交換会」を開催しました。行政や支援学校の担当者などを含め約70人が参加し、実習受け入れ企業や支援学校の担当が取り組みについて報告し、意見交換を行いました。



「親なきあとマニュアル」づくりは学習会からスタートしました。第1回は編集長の三城大介・九州ルーテル学院大学教授が「調査から取り組みを始めよう」をテーマに講演。調査の重要性と方法について説明し、「『親なきあとマニュアル』は単なる“便利帳”にはしたくない。これらの調査をもとに『当事者の思い』や『親の思い』などを明確に把握し、『こんな時どうすれば?』という疑問に答えることができるマニュアルにしていきたい」と課題を提起しました。第2回学習会は『当事者・家族の問題提起』をテーマに下記のように行われました。

当事者・家族の問題提起

親が元気な時から、親離れ・子離れ、自立を

藤波志郎(大分県精神保健福祉会)

親として一番心配しているのが、本人が自立していけるかどうかということ。福祉事業所に通所して、規則正しい生活ができるだろうか。就労を希望した時には支援するサービスが適切に提供されるだろうか。規則正しい生活を身につけるためには就労継続支援B型、一般就労をめざす人には就労移行支援など制度はあるが、実際には絵に描いたようには進まない。

多くの当事者は親と同居している。私の場合、子どもに仕事を与えたが、十分対応できなかった。きつければ家にいるし、水中毒になった。また料理もできない。これで親なき後自立できるのだろうかと不安になる。精神障がいのある当事者には糖尿病になる人も多い。グループホームに入っても生活できず帰ってくる人もいる。子どもは今、入院しているが、家に帰ってくると好きなものを好きなだけ飲んで食べる。これでは命を縮めると思う。病院にはグループホーム

で生活できるようにお願いしている。私も家内も歳をとり、家内は涙ぐむことも多い。

いかに早く自立できるか。同居で自由を認めてきたが、マイナス面も多くあったと反省もしている。今は、親離れ、子離れが必要ではなかったかと感じている。親元を離れたところで、連携をしながら支援していくことも必要ではないだろうか。

しかし現実には、自立させることができず悩んでいる親が多い。それでも、ある当事者が、親の体調が悪いため、自ら「グループホームに行く。そうすれば父さんと母さんも安心するだろう」とすすんでグループホームに入った。

「親なきあと」を考える時、親中心、家族中心の支援ではなく、親が元気な時から、親離れ、子離れ、そして本人の自立をめざした支援やサービスの充実が不可欠だと強く感じている。

自分を犠牲にする母親の気持ち

川口二美(大分すみれ会)

母親はついつい世話を焼いてしまう。そこが甘やかせる原因になっている。「かわいそう」とどうしても面倒を見てしまう。母はやさしい。自分を犠牲にすることをいとわない。そのために、本人は自分ですべきことができなくなっていると思う。いずれは本人に気づかせなければならぬと思うが、それは親には難しい。どこかにつないで勉強させなければならぬ。本人

が気づくように親はしていかなければならないが、今は親を支えてくれているという面もある。

親なきあと—これまでは、その時々が懸命で、考える余裕がなかった。自分が歳をとり、最近になって考えるようになった。いろんな制度が一杯できている。それを本人に学んでほしい。親は変わらなければと思っていてもなかなか難しい。本人に変わって欲しい。今日紹介された

本人アンケートに衝撃を受けた。本人がどう考えているのか聞いてみたい。いつまでも親はい

ないことに気づいて、考えてほしいと思う。

自立には第三者の支援が不可欠

藤内 浩(別府精神家族教室)

9年前から「家族教室」で家族の話を聞いている。クリニックの家族会や地域の家族会も含めると、年間延べ400人位の話の聞いている。感じることは、父親の参加が少ないこと。母親とは愛情の形が違うのかなと思う。父親は子どもに距離を置く。保守的で、困った事から逃げるのかもしれない。私も逃げている父親の一人だが…。

親なきあとを考えると、本人の自立が大切だが、それは親を含めて「支援を受けての自立」だ。そのためにはサービスの充実が不可欠で、支援は本人にも家族にも必要だ。日本は特に家族に対する支援が遅れているので充実させる必要がある。

自立にとって重要な就労にはまったくつながっていない人が多い。引きこもっている人、薬をたくさん飲んでいて、作業所に行っても人

間関係で体調を崩して休んでいる人も多い。何らかの形で支援につながっている人はまだいいほうだ。大変な人が多いと感じている。

第三者の支援は欠かせない。家族は本人との関係が近すぎて対応が難しい。やはり第三者の専門職の人、またそれ以外の人でもよいが、本人と信頼関係のある人の支援が大切だと思う。家族も本人との時間的・空間的な距離が必要だ。それが本人の自立につながるのではないか。薬も大事だが、薬がすべてではない。いい人との出会いがリハビリやリカバリーになると思う。

「人薬」—いい医師、いい支援者、いい人との信頼関係が薬になる。また、アウトリーチ型の支援も本人の自立のために必要だと思う。

「親なきあとマニュアル」の作成にあたっては、支援者についても調査やインタビューを行ってもらえたらと思う。

いつかは託さねばならないが…

子どもは発作でいつ倒れるかわからない。母として自分を犠牲にしてきた。父親は悪いというのではないが保守的。ついつい母親が面倒を見てしまう。発作は月に5回位ある。人に託すことは「何かあったら」と思うとできなかった。

子どもの自立とは何だろうと思う。手術後、何とか人に託した。支援の人はよくしてくれる。グループホームをすすめてくれたが、発作を見て最近はやわらなくなった。しかし、いつかは託さなければならない。だからいろんな人に関わ

安部綾子(日本てんかん協会大分県支部)

ってもらっている。本当にその子を見てもらえるようになり、その子にあった仕事が見つければと思う。ただ、本人には期待に応えようとするストレスもある。「本人にあった支援」が大切だ。「何が自立なのか？」と今も模索している。いろんな福祉を利用して、本当に託せる人、相談できる人を探すことが必要だと思う。私が認知症になったらと考えたとき、父親では介助できず頼めない。本人の兄弟が見てくれる場合も不安がある。親子で入れる施設を探したい。

意見交換

・「親なきあと」については本人に学ぶことの大切さを改めて感じた。「親の認知症」という問題にはこれまで気がつかなかった。精神障害者の高齢化の問題も重要だ。高齢者施設にも偏

見がある場合があり、「人を殴らないですよね」とか「人を刺しませんよね」と言われたことがある。他県には精神障がい者のための高齢施設があると聞いている。

・発病当初から障がいについての教育がとても大切だと思う。「親なきあとマニュアル」は「考え方マニュアル」にして、本人や家族の考え方を変える手助けになるものにしてほしい。また、「自立」は家族のなかでの自立もあると思う。

・障がい者が65歳になると、介護保険が優先されるため、福祉サービスが十分受けられないために困っている。障がい者のための老人ホームも必要だと思う。

・「親なきあとマニュアル」には賛成できない。支援者を受けている人にはわかるかも知れないが、支援につながっていない人にはわかりにくい。リーフレットを発行した方がいいのではないかな。現実には何かあったときに訪ねていけることが必要だ。たくさんリーフレットを作って、支援につながっていく人に配ったほうがいい。

・本人に親以外の人と関係ができていればいいのではないかな。親子のみの関係のときに困ることになることが多い。本人のネットワークを広げていくことが必要だと思う。親が託しきれないこともある。支援の内容を充実させることも必要だ。

・お金のことで家庭内暴力に至ったケースがあった。本人に「まずあなた自身が変わらねば」と話している。

・発病時、母が寝たきりで父も本人の世話をしないというケースがあった。ヘルパーから相談があり、本人は入院した。母が亡くなったあと、退院した本人は父に食事を準備し、「父を看取る」と言うようになった。第3の機関、いろんなサービスや支援者とつながる事で調整できていくのかなと思う。

・統合失調症の人の退院後の受け入れ先を見つけることが難しい。

・クリニックの家族会の参加者が増えている。そのなかで、本人、家族、支援者の感覚の違いを感じる。

・訪問看護ステーションができた。また支援を受けた就労(三菱商事太陽等)も進んでいる。

・問題をオープンにすることが大切だ。行政は「何も言わなければ、何もなくていい」となる。もっと前に出てほしいと思う。県南でも「フォーラム」を通じ、家族を含め地域で生活できるケアを実現できるといいと思う。

・家族の声が少ないのは、これまでの日本の精神医療にあり方に原審がある。そのような問題を含めて、家族が社会的な運動をしていくことが必要だと思う。そのためにはマニュアルだけでなくリーフレットも必要だ。

・私は本人なのでネットワークをつくるようにしている。

【学習会で紹介された資料】

単身生活や住居分離「できたきっかけ」「できない理由」回答比較	
分離生活ができたきっかけ	分離生活ができない理由
<p>【20 歳代】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・独立、自立するため。 ・母と折り合いが悪かったから。 ・プライバシー。1人で酒がのみたかった。 <p>【30 歳代】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・結婚。(4) ・親ばなれしたかった。 ・生活保護を受けるため。 <p>【40 歳代】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のできる事は自分でやりたい。 ・グループホームがなくなったため。 ・親に1人暮らしをしろとすすめられた。 <p>【50 歳代】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親が亡くなって、落ち込んで、また入院しないため、今から1人暮らしを始めている。 ・住み込みで毎月お金を貯めて、アパートを借りて生活を始めました。 ・母が入院してしまったので単身生活になった。 <p>【60 歳代】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・独立するためと親に負担をかけたくなかった。 ・生活保護を受け始めた時。 	<p>【20 歳代】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お金がない。(3) ・1人住まいができる自信がない。 ・親が生てるから。 <p>【30 歳代】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親から信頼されてない。 ・親に頼りきりなので。精神的にも経済的にも。 ・お金がかかるから。 <p>【40 歳代】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今でも母にまかせっきりです。 ・何度も入退院を繰り返しているの、グループホームで様子を見ています。 ・アパートを借りるのに、保証人が居ない等。 <p>【50 歳代】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1人で住むとか分離はしない方がいいと思えますから。親といないと、1人でやっていけないからである。 ・家賃が高い。 ・母が老いて私が母の世話をしなくてはならないから。 <p>【60 歳代】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さみしいから。 ・経済的に1人では生活できない。
<p>全国精神障害者ネットワーク協議会調査 (2008年)</p>	

平成25年度九州ブロック家族会 精神保健福祉研修会 大分大会

九州ブロック家族会の精神保健福祉研修会が2月6、7の両日、別府市の杉の井ホテルで行われました。2日目のシンポジウムでは、藤波志郎代表（大分県精神保健福祉会会長）がパネリスト、三城大介副代表がコーディネーターとして参加し、各県代表とともに「親なきあとを考える」をテーマに議論を展開しました。議論の柱は「医療」、「住居」、「日中活動」、「就労」の4つ。重要な問題提起だと感じましたので皆様にご紹介させていただきたいと思います。

シンポジウム「親なきあとを考える」

「医療」— 長崎県精神障害者家族会連合会 宮下栄会長

日本の精神保健福祉は歴史的変革の時代になり、入院から地域生活中心への流れが進んでいる。厚労省が「アウトリーチ」に予算を付けた。しかし九州では半分位は実施されていない。長崎市では北と南に分け、大きな病院が二つのチーム（医師・看護師・PSW・薬剤師等）をつくり、アウトリーチ支援を行っている。往診するクリニックもできた。病院の検討会議には家族会からも参加している。訪問支援することで症状がよくなったいる。

「住居」— 熊本市心の障がい者家族会 宮田喜代志会長

グループホームと相談支援事業所を運営している取り組みも踏まえて、「社会モデル」、「共生社会」、「合理的配慮」、つまり社会の責任で地域の生活を支えていくという考え方が大切だ。キーワードは「つながり」。一人ひとりの多様性は特別なものでなく、私たちそのものだ。われわれ自身が就労支援も居場所づくりも住居もいろんなことをやっている。「住生活支援」という言葉もつくった。コミュニケーションが重要で、それぞれの支援で必要な事業所と密接な関係をつくるようにしている。

「日中活動」— 福岡県はまゆう福祉会 大堂圏治理事長

遠賀郡4町の委託を受けて地域活動支援センター、就労支援、グループホーム、家族支援等の取り組みについて報告。エリア内には1800人の自立支援医療受給者・手帳交付者がいるが、事業利用者は1日平均50人。情報不足や家族の閉鎖性などにより利用者の定数を確保することが困難な状態だ。経営的にも減収になっている。また、発達障がい系の利用者が2～3割に増加しており支援が難しい。しかし、事業所としては「居場所→生活技術習得（料理等）→就労支援B型→一般就労」という目標を明確にしている。本人は訓練の過程で変わってくる。妄想などが出てくるが、レク等で職員が信頼関係をつくり、施設外就労等に一緒に行くことで意識づけができてくる。発達障がいの場合、コミュニケーションをとってお互い理解することでいい方向に向かうと感じている。

「就労」— 大分県精神保健福祉会 藤波志郎会長

就労支援事業所の管理者として報告したい。毎年、2名から3名が一般就労している。企業に就職していろんな問題が出てきたときには支援機関や企業の担当者などに声をかけケア会議を開く。就労支援員が同行したり、何かあると「顔を見に」行く。ジョブコーチの役割が大きいと思う。失敗を生かすことも大切で、連携や連絡を重視すること、事業主に障がい特性を伝えること、キーパーソンを決め日頃からコミュニケーションをとっておくことなどが重要だとわかってきた。また就職後の定着支援も欠かせない。勤務外の支援も必要で大変だがやっている。

会場からは、家族会のあり方やACTについて質問がありました。

コーディネーターの三城副代表は、「地域で協働し、一緒に何をしていくかということが大切だ。地域にいるあたりまえの生活をしている人とつながりながら、多様性を受け入れる支援を実現したい」と話し、さらに『親なきあと』の問題は簡単に答えが出る問題ではないが、今日は一緒に考えていくヒントがたくさんあったと思う」とまとめました。

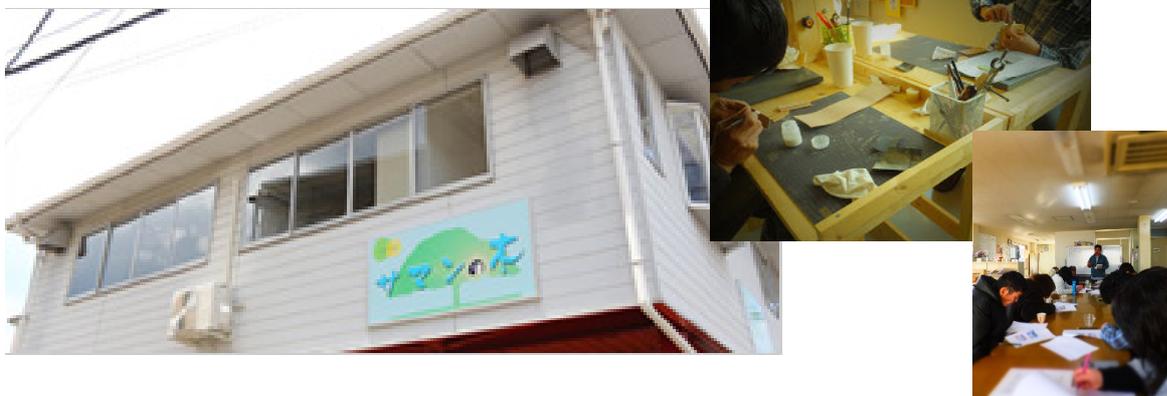
「就労支援と生活支援の想いを形に」

大分県精神保健福祉士協会 森崎大輔

精神保健福祉士の資格を取得後、精神科病院、地域生活支援センターに勤務後、現在は教育機関に勤めています。

その間の経験や就労推進ネットワークで多くのことを学ばせていただきました。

私なりに現状の就労支援や生活支援への想いがありながら、教育現場での勤務では実行できないもどかしさを感じていました。そんな折、同じ考えをもった精神保健福祉士（現：一般社団法人 SW ライフ代表理事）と精神障がいのある方の「就労や生活」について、語り合ったときに、お互いの想いが一致。平成 25 年 4 月に「おおす和み」グループホーム、同年 9 月に「サマンの木」就労継続支援 B 型・自立訓練（生活訓練）を大分市に開所しました。



“サマンの木”では、施設の中で自己完結するのではなく、就労移行支援等を強く意識し、「一般企業への就労」「自立した生活」を目指していきたくて考えています。

もちろん、一般企業に就職することが目的でなく、希望をもって長く働くことができるようになってもらいたいと思っています。そのため、“サマンの木”では「就労ゼミナール」「SST」「個別支援」に力を入れています（スタッフ 8 名中 7 名が精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士と専門職）。

まだ、開所したばかりのこれからの施設ではありますが、“サマンの木”のスタッフや関係機関と協力しながら、利用者一人ひとりの夢（目標）に向けた支援を形にしていきたいと考えています。

毎日の活動をブログにしていますので、「サマンの木」で検索して閲覧下さい。

また、今後いろんな取り組みを実施し、ホームページで発信したいと考えています。

大分県大分市 就労継続支援B型、自立訓練（生活訓練）、作業療法施設（グループホーム）
一般社団法人
SW Life SW ライフ
ソラ
資料請求 企業ロゴ
☎ 097-578-8855

トップページ SWライフについて 企業情報 初めての方 アクセス お問合せ

就労継続支援B型・自立訓練(生活訓練)
就労移行支援センターにない、障がいのある方、地域交流、社会参加により、自立した生活や就労を目指したケア・指導・訓練の支援を行います。

共同生活援助（グループホーム）
サマンの木
生活訓練カレンダー（予定）
就労継続支援B型 作業風景
自立訓練（生活訓練） 風景

サマンの木
資料ダウンロードはこちら

スタッフBLOG
SWライフ click

新着情報
2013/12/19 生活訓練カレンダー11月予定表を更新しました
2013/11/26 生活訓練カレンダー12月予定表を更新しました
2013/10/28 生活訓練カレンダー11月予定表を更新しました
2013/10/11 就労ゼミナール開催のご案内

第9回総会のご案内

2005年の厚生労働省委託事業「精神障がい者就業支援九州・中国・四国ブロックセミナー」の大分市開催をきっかけに設立された大分精神障害者就労推進ネットワークは9年目を迎えることになりました。これまで、アンケート調査や先進地の訪問調査、県全域を対象にしたフォーラム及びセミナーの開催、3冊の支援マニュアル発行、5市で10回に及ぶ地域フォーラム開催など、積極的な取り組みを行ってまいりました。今は、これまでの取り組みのなかで明らかになった精神障がい者と家族にとって根本的な課題である「親なきあと」という大きなテーマに正面から取り組んでいます。

新年度はこの「親なきあと」を中心テーマとして掲げながら、「親なきあとマニュアル」作成、県南を対象にした地域フォーラムの開催、熊本県の先進的な取り組みの訪問調査などに取り組んでいきたいと考えています。そのスタートとなる第9回総会を下記のように開催いたします。記念行事として「親なきあとを地域で支える」をテーマに講演とシンポジウムを行います。どなたでも自由に参加できますので、ぜひご参加ください。

日時 6月21日(土)13時30分～16時

場所 大分市 大分コンパルホール 3階 300会議室 (大分市府内町1丁目 097-538-3700)

内容 講演・報告 「親なきあとを考える」-現状報告- 三城大介・九州ルーテル学院大学教授 他
様々な事例や声の報告と、熊本や長崎などの取り組みの紹介を通して、「親なきあと」について考える方向性を提示していただきます。

シンポジウム 「親なきあとの暮らし」

家族、支援者、研究者のそれぞれの立場から、「緊急時や病院との連携などの課題」(家族)、「地域の現状と民生委員学習会の取り組み」(支援者)、「認知症の地域支援の取り組み」(地域ネットワーク)、「緊急対応について福岡県の取り組み」(研究者)について報告をいただき、意見交換をしながら今後の方向性を探っていきます。

編集後記 会報「ささえあう」の発行回数が20号になった。ネットワークの活動も9年目に入る。新年度は助成金もいただきながら、「親なきあとマニュアル」発行と県南2市等でのフォーラム開催をめざすことになりそうだ。20回の「ささえあう」に込められてきた思いが実りますように。(〇)

社会福祉法人
そよかぜ



ふれあいステーション ひので

就労継続支援B型・就労移行支援事業所

心の居場所”・自分の仕事”を見つけるために



- 自分の心の収まり場を見つけることから始めます
- 「何が自分のする仕事なのか」を見つけたとき、喜びを持って毎日暮らしていけます
- 自分の力で安定したものを見つけることによって一般社会に場所を変えても生きていける。そう思いながら支援しています。

「人とのつながりとか人を大事にする気持ちがわいてくるところです」(利用者の言葉)

速見郡日出町字仁王山3531-24 TEL 0977-73-1326 FAX 0977-76-7555 メールhinode@po.d-b.ne.jp